獲魚畫日誌

大正八年四月
中院起筆

特別
イ4
1919
577

176842

漁業日誌

大正八年四月十五日起業

四月

十五日

晴風、往村宗八出版の件、
来訪、史記國宝解説書文
を基に、文部陳述を終し二日分
おつるべく製造、今年は一二寸を
す、今日大漁にて於
其の財産分を配
分をこれ十一時

38- 9365

り家を出づ、電たまたま十二時今橋を
る大毒海岸霧屋尾くたし一時
[illegible]
雨と過ぎ

十二日

六時後時、朝来文[illegible]海岸を拾し三番
[illegible]
後[illegible]石塚と印[illegible]今時石塚
[illegible]毒液の[illegible]午[illegible]を共
[illegible]

り珠玉を[illegible]し二十四拝入、
四方神[illegible]田原武天の[illegible]
中佐藤伊助来訪、午前中地震あり

十三日

小雨、[illegible]天寛[illegible]依新の同人自
[illegible]傳[illegible]文加[illegible]す畑
[illegible]吉[illegible]村貢小久(江戸人)[illegible]午
後[illegible]佐久、出迎、同志を過ぎ[illegible]三
田東洋和と同吉郎[illegible]人([illegible])
を[illegible]活動[illegible]二十名出[illegible]坂上弘

花まるの内子と注戦（ロリヒン）を施すこと如
石塔海岸

十七日

晴、毎月十日博覧会に於て内閣官の講演
会をつゝけ来り森鷗外氏、山田美妙
氏の作品の寸評を紙に書出す、
村貴氏と子息政春君の書画
を拝観する、午後印刷会社に到り
子細を見る、後本郷珠盛園を訪ひて
漢文指南宮氏外数名を誘ひて

る、来晩博覧会に再来、北城
講演下書刻成を内藤久寛氏
寄送あり内閣印刷局に送付
する、

十九日

晴天、日本図書館会に寄附金の
謝状到る、廿五日田中稔積宅に招き
開中茶会、前田香雪の後志ふ孫蔵
を訪ひ、十時半過日本橋油屋祝
高島屋の茶を飲む、花二千の茶を飲む、内

路留酒肉等沿帆を始め、午後沼内
廣瀬等の来訪、義弟文井海治二の合
を帯して来る、この秋吉要吉氏の義弟
来訪二三の紹介名刺を乞ふ、山田順吉
郎なる者。

二十日　小雨

朝、風、北海毎報く文井の船三日分
の食料及び二日分執筆する、田中
徳積来訪多の校務を談じて去
る、夕後又北海毎報(原稿多)を
後北の船生に物を贈のて、之を、海岸
光を作る根生物に物を贈り田谷三
河屋に贈す。

二十一日

晴、早起文井海二日分執筆し
終義氏の義を終のて義平の書義
を終り、昼食後、東京帝国博物
の書状を高らし、昼後出発林以士
(獣医)早大高等学科に入学志
望なる、森陽を訪き又

明治四年の海漢病を横濱へ送る件と
対馬藩より、内々ワクチン注射を受ける
ために坂上弘義を遣わす、東北巡り海
芸二国巡覧し、高知藩漢ゝし受おの
日本国民史のシノプシスを送り来る。
午後又文部の役を呼し多数の者を
使ひて明治五年、阪ゝ出発
(在京)三一名を分す、北海道巡行巻
巻を読む、対馬藩の件、森脇年
表

廿二日

風、雨、寒冷、林坂士に出発論多
元方状を附す、横濱清漢の件有大
隈家を訪ふ、内務卿 只今自転倒
移転奉仕来る且つ私を訪ふ、北海
詩話巻本保存
五、午後神田に数菓国寺を婚ふ、内務
雨に遇ふ、阪口氏を奉ふ、生
奉天の山時坂の内閣事務局
を送る

廿三日

かねて、きう方掃除を行ひ、朝茶の後海岸を
散し、二合を以て廣井一並木完了
清の来る、正午出て、弟四の方部を
訪ひ、若干の図書を贈り、松雲亭に十四
村々に二十円、弟の内拂、石塚三郎
ゝも来る、又の図書部場合ら
来る、明日廣島部場合ら来る、拾四
部書籍を天ゝの土産墨茶に果
物を贈る、晩方源子書一部来る、

廿四日

晴、風、文部の役を辞して二日分
きうり出る(昨夜)す、山田氏
祝義本書為大能書 好条、二三
の図書の表紙改正を頼す、場合
用ゝ森脇図村来る、午後四時
部別会祝ゝ別の
拝領ゝ百科事典完成の事を報ず
来る、なお内意是迄通商事務局、ゝ
第ゝ時何僧来図ゝ図書館場合 特部
分を通ゝ金ゝ 午前十一時出発

坂口五峯ニも来書

仕者

時、素賜する三宅雄二郎完書状を典
ふ、朝倉右衛門ニ依頼の四人自筆
を渡す、且つ黄色紙、文庫の
林以士入りのことゝつきて集治官の来
伝奨学金の額の内、廿五円納付
午後印刷局ニ到る、新聞を見る、会社
高田屋内坂本田中惟一と共ニ田中氏
宿の家ニ招かれ晩飯の饗を受く、

下村大尉の結婚式ニ臨むつきこゝ大隈
家ニ行き祝儀を献さんとする内
家ニ出張、帰来、また出張、伝教
の帳子三出来、稲葉長山ニ通書を送
る

廿六日

時、到る、早朝坂内通過、高知出業
英集の回書を出す、示す、三程通過
寄附す、内付大隈侯を訪の上一的
弓場の後、帰宅、高橋義雄
海色筋ニ行くこゝ共書 栄人

[illegible]同書代金の内[illegible]十四銭、[illegible]
[illegible]午後四時[illegible]
中数冊祝の書状に同書を添へて
[illegible]池田君宛[illegible]
[illegible]

二十日　日曜

晴、早朝[illegible]前島男尾崎の電話
[illegible]
[illegible]聴[illegible]九時侯の邸に[illegible]
[illegible]動位日を延ばす件[illegible]侯爵と協議す、
[illegible]八一[illegible]書冊の訳

別る、十一時外出二三の書状を[illegible]同
[illegible]、立花[illegible]電
話[illegible]前島男[illegible]
地に電話[illegible]報ず、遺[illegible]小石川邸
へ十時迄自動車[illegible]
[illegible]寿る授勲[illegible]
(大隈侯の[illegible]を[illegible]ことも[illegible]
午後[illegible]
る起[illegible]前島男村[illegible]の三[illegible]
一快を始[illegible]、[illegible]板上弘義を[illegible]
[illegible]材を[illegible]快の[illegible]前島邸へ

行こと、

二十八日

晴、山田氏来賜、義財事、九時前時
郵に到り西午后行き、輯疏、昼過ぎ
雲九時つる、前時男生お武事月二日と
決す、貴賓お義地等れ、打合せ
の云、時事報伝報動の件有り、通
知する所なりしも前時郵に到り廣瀬
[illegible]おと協議す、未だ埒明かず
す、玉珠本を他へ[illegible]山田に托し[illegible]

山房印賞の印受七百枚白紙摺り出
来済み五冊整理を托す、午後体温三
十七分三分昂進、假寝夕刻に到る
家家静日笑三回忘れ山[illegible]
十の一画刻す、前日来冷、微恙
のまま過ぎと云、博濱大火の報到る

二十九日

晴、田村素賜協会の件去る廿八日
を以て報知を来す、小田島桂香来る午
後を過ぎし後の風雨海と明を待て午

後体温を検す、無熱也、桂香・陳林悔代の
内二十四枡、午後閑を得て内義の自叙傳百
頁程校閲し畢る、

三十日

雨、内義久寛の自叙傳を校閲す、海津男
らし書を送り前略男の葬儀につきこと々
す、代々木より桂書を傳入書るる也
の手入を始め先つ昨の庭子の橋校餅
三信あり仏橋を心くしたり、日活印刷会社と
刷りの予約を見る、午後祇園に出て月

光と東郷の菓子花平を婚礼
材料者と同者とを婚のこと、内事後
略宮の酒佛面の異経をすず珍柳子を贈答
し畢る、前略家、遠花々環を贈る、家
、印生況三四忌法要婚ことの、謝状を
出す、前新乃新聞の切り海を絵ことの
略の如く婚礼これ挨拶状別紙と義し
迄者を出す、不用回書花平義会より
取寄せ不の義印の料とする、物すべ
坂上寺金天略こ口ケ寺注財を施し
て去る

五月

一日

雨、当港に於て出来、四郎人
竟の自転倒抜しより供と共に帰る、屋
寺迄に元用回を書印す、此船行程
寺状を送る、春暖来る、十時雨霽る、
出て諸所用の物を整ふ、紙屋の移転と
鉄す、中食後四郎の書の訳到る、賀
田以武書来る、中食後
四郎帰る、田村今治より
来る、午後十分の急の流来る

二日

大雨降るも夢覚り直ちに起床、五時半車
中の客者に於て朝食をとり七時半分京
都着、直ちに自動車に投じ直ちに旅宿
旅館へ入る、一旦後下村西方寺を訪ふ、此
時の祝詞を述べ故の書類の事業
子を終る、四郎後帰「改造」記者山本寅長
利を訪し面会をおひ話しもあり

京都と向け出発す、車中投友五名喫三
食す

於て弟を給のて朱間寺西祇を賜ひ吉
書茶器等才を献てうくる、谷村一方ハ下ちく
菓茶の菓子を出さる午後若林
細川の二寺庵を給のて回世を過る今心
のうちのうち、三時頃まで有て下村
の結婚式と略式に細川の所い折回庵の
次の也、祇園の御式ハ下村家の
式に比すれハ甚だ簡略なる
習を要する大也式後祇園祇園
屬の吉祥に於て宴会を催す食も
無うるハ内分ならり、後ハ〜うくる

三日

小雨、朝来ちらく細川山田二寺庵を訪ひて白
竹園寺を過りて珍寺蔵の諸更衣
後院を比較して比較ハ午後木庵
西部尾方に上野栄寺を訪ひて時を過じ
寺にて祝ひ之を田山に数菓祝を賞
し終て多摩川の川り祝宴の方を訪ひ
ひるにて帰る、お出中下村新宅西祝
へ行る、来訪、与野町を経て家
流水に寄せ寺ちの物菓と法す、午後
家を上野の間に移す、之年宮家人客死

の家也、客の来り給ふもうるく心甚閑、茶
後程数頁著し果り晩食と相ひビール
二瓶を喫す、北支酒味淡々多く腸ちう
西宮也、食膳の蔵はこ自分丈、也貴
格家の料理前と異うて悪業流味
を与へて可惜す、蟬と聞くバ三合廿料
理屋らしく運ぶ也と、めぢの旅客の宴ら
忌を買りん

四月

特時、ら紀方時の急行にて東都を出発す

前日村こ電話を通じ其の手配電報
電着致すを義す、大丸の辻春浪氏
停車場に来る、車中多郷淡青徒
もて食事と酒を煽り三四合黒紋々
る入り約八時こ十分入京、其と自動
車を駆りて帰わも、本年中田代京人
らも寸珍帖二冊を贈り来る、六七、お
の中国平孫七を用ふ之亦法要の業
内来る、北海道数ら原稿紙千枚到来

時時、朝来西京守のもとを訪ひ、丁度
午後の時分に帰宅せり。
因て、謝書を認めて、中間銚子に
要く、先づ高橋義雄氏の訪り状を見る
旦つ香を送る。高橋源
一郎氏、昨夜、山田藤樹氏来る、主用
陶士後篇碑に関する協議午後を費す
高橋義雄氏の鮭の味噌漬を贈る
高村光雲氏、来る旦つ陶印譜(林
如山氏編纂)を贈る。主人、海者を考
す。昨日茶菓十頁完了、南山財治所

陶隆一氏、来る新色柳を贈る

時、不本時時、朝来茶菓を贈
寄し十数枚成る、佳作多し、玉川堂に
茶を贈り、二三の書店を訪ひて雑書
を購ふ。うるる、高井一氏を訪ひて交の
午後、勝寺を訪ひ、河原慶寺に来る

時時、来客、時年式、茶菓寄与

城代家老より書面出府を約す、
午後より光子と共に市中の物価
を見る、数軒の紙屋の活動写真
を観、晩方松五郎に別れをくる、

八日

昨晩風、文林の家督方合を知らせ
るの為め、桜井一郎、賀久井の使
の帰後より、十時より生駒部
屋に行き、丁度約束の
時刻に文林と十時前刻引を新

みつる海辺、森脇美村来訪、午後又文
林の宿を訪ひ二日合成る旅園に義
を授ける、

九日

晴、奠都五十年祭挙行、ちよ子約手
二枚（七十銭八百円）訪問（訪問往復）
約手を出す（訪問七月八日）春脇来訪、
高橋義義高橋源一郎来訪、五十公
野土地登記に関する委任状
外二高橋立昌義千金二十円也高橋

て、海し海辺、博多長崎等の事後大隈侯に渡し、二時頃組合に送りてくる、長谷文部次官の書を見し、三日分書き了る、

夕、初めて見る八十四歳の人、来る、拙書を与へて終る、

十日

晴、市制発布三十年祝典奉行、開会の義に付き市内の図書並に帳を持出す、午後後藤書記、石井市内の修繕書を送る、午後熱風起る、大阪の高田吉表と二三回書の交換をなす、之の書を、之の書を印受け冊子と万数の印を捺し三冊の印譜を作る、小林氏から市の図書館の図書を送る也、熱風甚だ烈し、夕刻に至り衆議院と雨次し、海辺に出づ、

十一日　日曜

晴、風、家義の印を整理し且つ印譜を作り終るを清す、十一時頃一時の間、神田を数度来りて相を語る

風月堂に飯す、如出中旅館也、夕刻雨

十二日

雨、氣温昨日に比べ二十分低下、當所
必来る、寸珍氏新聞を拡げ、政黨を拡げ、
夕方印刷会社の会に後会に恢も、午前
後、高田博士と出所部に会す、四時よ
り麻布に比むく金次郎の方に会す
寄り寸珍氏十冊を梅の四時に南
蕨文家す帰る国者銀場会、夕飯不

十三日

雨、小久江を拡き、永楽倶安部に会す
、出すべき書面二枚を示す、稲村氏
氏の病気発文を高らかに来る、かく
して生る、森脇金本来る、丹美立
三々々北者の方状を報し来る代筆
之典、二月上旬死去の旨なる所の明治初
めを喪を出す、丹美原平に書状を
出す、午後沖田に散来し二三の書信

を作のこうくる、中世鎌倉流を伝承の物を
発る、

十四

雨宮、早記す珍本疑書紙物紙、郵物名祝を
後名通知る、故に拳出来事、実印に所
すべき雑帳二十を紙永楽倶安万の物
を、拙四の書庫を拓き而用施本を長
印す、高橋源一郎絵為碑建設新書を
数えまする 浦印の上返す、午後下村訪
夫妻 接待の為り来訪あり 紙金紙為二

個を贈る、陸奥国無死者 高田郷と別
り帯び、寛宏年〜押書を屬とする古物
庫帳庫より出る外と短冊掛物も三枚
贈り来る、高橋義長古作隆一好美
四ヶ〜之物を見せ 大江彩子吟美立
の絵果を義光とする

十五

景天、高橋義長を来書、大阪若田沼
父の庫を三種別(写)、依て木義郎郎来
ス、前野男爵家の家を拓す、
本堂三田村宗立印来訪、分譲八一

こまをなす、原宏平、大坂の産田市庵
と郵出を出す、午後加藤士綱
爲神一律を試む、十数枚を試
み、行吉の右を採る、律をやまと形
少時にして遠藤指原まる、而過、時ならず
して起す、森脇指濱海濱今の件
に付其沙、和田蕃吉ともに来る、塩谷
に持返す、深夜西方ならず

十二月

晴風、今朝八一ゝ来る市、廣井一郎訪ふ

を拒す、横井吉郎に市村を出し其後を
もとむ吉田清士紀定郎のことに関する沙汰
隆一ゝ来る、やまと行きの指原義
芳中遠義吉来る事法、文部海語を三
分行しうる、明治廿二年出版す
今晩早大隈邸饗
郵便夫の為を問ふ、日里春平ら
吸多北川前島郎の件
坂の詩をもて招ふる、

十七日

墨冷、早紀之新海岸三日分を好し
十時と別り[illegible]所[illegible]と行き常
[illegible]と横[illegible]田[illegible]の[illegible]
[illegible]潮し午後と別り[illegible]瓦[illegible]を
[illegible]と[illegible]り[illegible]、大江[illegible]坂
山五岸寺[illegible]立岸[illegible]日黒寺[illegible]
[illegible]坂[illegible]毒坂[illegible]

十日　日曜、

晴、高橋義[illegible]寺、文珠の[illegible]
田分北城[illegible]

十時十九分雲車大濱停車場と同車横濱と起むく、晴々田
時と富田横山四戸[illegible]
[illegible]、大濱停[illegible]
[illegible]原文[illegible]ニ[illegible]濱[illegible]と
他の一行の直ちに横濱[illegible]領を[illegible]
[illegible]海濱[illegible]と[illegible]東ハ野と[illegible]の
淀天の石宮とする（由）栗を[illegible]
[illegible]迎て一行を[illegible]由つて一行[illegible]
無[illegible]
[illegible]

此の写本を一冊に装束せしむる也綴
ハ七千廿六人を定む、写字室副本
らしむ、本を渡す、此日の出席者は浮田岡田
中山(鍋島)氏鈴木千葉を除きし
四日山内開会、数名に依りて也
二十分の電報あり信と共に御帰京す、
池田氏帰京の由を承る、宮川
職方中の訂正刻る
十九日
晴、従村来る、史記の原書案を得て校
井上氏来る、尚又坊士経念頼みつき

示す、の礼を為す、大隈邸を始めとし文
明治の学者に出張の謝意を陳ぶ
其印刷局長に別り職工増給の訓
示を為す、内務省を始めとし諸官衙より
剣刊の件に付協議す、略記ちぬ記
行くこと寄り金三百円借入、赤脚
寄稿三十五題、校字は返却せ是年又
従の太田と旋行中其の所の風
意を報すれん四枚の緒言を
寄せらる、内務省と自動車に同乗上野
美術協会に陳列の支那各代帝王

の蓋を一覧す、星野禮吉氏のもの也
恒金瑞珠君と之を寄贈の図書を
始め御室の内主任内務

二十日

曇天、朝来文泉陽海を好し二日合書
、到送す、高野の物語る科学定成
を出げ才十巻を高らし寄り賜ふ、此
の書中より余の書籍も納めあり、余の
此書の紹介と御面の助力をなす光
あり厚く其の完璧を喜ぶ、午後より数

来二三北田の方体を訪ねしうくる、
的晩餐なり、多分中ん之寄生巻
を始めしたい、美切にはもうく仕
日教り出多と決す、

二十一日

小雨、母其原平と多電の後出多を
報す、横井幸吉もすい使を出す故去
田博士伊金明原氏の物書を、図書
館の本と書状を出す、文泉の物を
出す、山田博士等寸玲子

蓋を為して出来、桑腳金清の高を来
す分、閑古ヶ二世の訃到る、閑に乗じ文来
の行を属して二時に到り死亡する旨電
書来る長印を交付す、旅四郎に出
て、柩を腰ひ内々内田の金に新く準
備を為す、

廿二日

雨、文来の行二日合参送、こんを初めよ
り九十二四に及ぶ、個後の親族四人に数
回の論書を為す、午後旅四郎と二三の同

志を婚ぬ、夕飯八時過ぎ個後の時景作個後を内田の
金に新く、偶と雨に沢御中塩原温泉の件
御に起くる為し、寝基新満る、又明日
の為に長中ヶ原井一と車中に合す、

一陰

二十三日

真江津より物ぐ、書を出き北個後物
の方長珈金等を揃景す、同社の間を
印車中に入り来る、八時二十分新潟と
着、所用を済ませる旅宿二三

こゝなる、余は雪降る五所のけん、下車村上所
を待合すること三十分ばかりもこゝに投宿、初
めて郵便局にて郵便の事のスタールのおれ
旅行を張り、此歌都出時雨なる空
氣濃く、所々曇田色こゝ所り天氣晴れて清
明十時中五分こゝ雪降し直と雪降舟出と投
す、北堂学校庶務稍こ宜敷なれ来り不過
位なれば、余を親しく親切こゝ云しく旅
疲清泡なり、舟出して物の出来の土産品こゝ
本所西畑秋月氏方こ寄宿を始め、着
後ほどなく舟出こゝ女子出生、家

中業所こ雪業量掃き捨つる時の中ゝ
用合の家庭者こ臨る一場の海演を
めらる、諸す、舟出五番舟出こゝ化
ゝ物を好る

二十四日

快晴、所々高岳庫雪ゝ事出なり
此方家所々の掃雪こ臨まくまも秋業
内あり、丈八坂こゝ中こゝ電話ゝ十時中
保中業を合掌こゝ合の家育合こ
晩々敬後の家育こ乾こ二時ゝ浴
この清流を合す、終こ合長舟後五本

夫婦と食事をはじめしに雨降りくるゝ十条
安積兼ゝ和馬者庭の傍と成し博士も
来訪ひ坂と五番ゝ電流すさ的修行
多田を発を出港を今、雪ゝ和馬者
手を進三の息お二三度始ゝ金の浪
流の成功を今、十的寝ゝ新く雪降
とゝろき雨降る

廿五日

雨後雪ゝ新七的五十分中条出発
行船的ゝ拙ゝ早起北雪ゝ別を告ぐ

中条ゝ車夫到達庭刻の汽笛終ゝ十
的ゝ出発の汽車ゝ投ず和馬丹羽上
山的二三人停車場迄送る車中皇
津未亀ゝ乗し福島着ゝ早く甚田ゝ
着高橋屋ゝ投し高橋義雄ゝ電
報を発ず五十分後浄居寺
ゝ到り支局兼ゝ歴代の墓を参し香
華を献ず支局四年十七回忌庭ゝ
ゝ四年時者ゝ浄居寺を参詣な
ゝ以外ゝ人を出ず寺ゝ金十
円差出ず 住職 故高の為久しく家

家に引えんとせしに幸ひ山こうく
りとて出て、掘し見つ接続を為すべき
家族に赤面せず、業子の訪ふに間
没族く配布一の元也、山上墓地の道路
破壊する石を以て修理せんとの計
畫有り余も義年の出金を拠諾す、
此の家家先代の墓を移す、簿
金寺境内に隣る地を開き設け
先祖、墓碑の高所余輪廻し地
る事也、今偶に訪ふ田舎に於
て真路桂坊より今一所の活法を文
へて為す、鄙を思ふ事を為すこと能ふと命
しとなす小事也、四時を十分の活来と
て活用に新もく、芸術倍年物消費大
金表八月廿二日の出発を為す
車中中宮欽次郎一二の人と共
活用に当有六時半藤田能彦校
丈、東京市に帰信、義後坂口大学山田
教授同伴誘引銀泰屋と能し研究
十一時旅館帰くらく、鳥居錦治郎の計
到る

時、先考十七回忌ゟ菓子十一箱注文
且つ小包弐箱送ル菓子屋ニ托ス加
賀屋ニ寄ル、栗本貞次郎・鍋田晋作・
菓子を贈る、高橋義義・井寅一郎
御空蟬城入江左一郎交ニ来訪、高橋
ニ小物屋の印二顆を刻ましむることを嘱
し印状を交付す、夕刻ゟ社ニ到り
見る、午時ゟ社ニ招ル行形
亭ニ午餐の饗を受ク、高橋義井
御空入江時招ク坂口加賀之人数名

斡旋序上会尾を訪ル、三田佐久
出張の高田屋沢塩湯帰着後の様
子を聞ク、夕刻ゟ高屋ニ行ク、余も招
ルを共高屋ニ赴ク、話笑ス、夕刻銘茶
屋ニ於テ市内校友の宴ニ与ル、余も井
上辰九郎と共ニ出席ス、同じ家ニ真
崎佐城・佐藤政吉・中村隆治等ゟ
余を待つ之ゟ来る、佐吉も来会ス旅屋ニ
ゟ

時、早起うを発し現す、鳥兵錦次郎
氏と共に書を携へ、之新高田橋停車場
織道を出す、弥彦を経て伊彼浦に
稲ゝんとすること、余所行の用あ
り同行する能はず、朝来高松四郎左衛門
高田)高田に至て栗林氏を訪問
海岸高城高田を経て入江氏三一郎
氏と面会、山田敷城
栗林氏の紹介状へ
旅宿国境の間に二四名の活弁を試
不幸紹ちしむ、十一時交際終て去る則

ち人の場と変じ四五枚の新面高面
を排せもす、栗林氏、松えん五峯と共
に場所屋に年玉の興を尽くす、三
時解して出発の準備に忙しき
最中二三の校吉挿子もを来の
に、勝て乗し寺門新聞社の新所
記の長筆を者るを知て六七枚の高
面を出す、高橋桂吉氏流五峯
七六金を停車場に送ることとなる、
五時三十分の汽車を改す、高橋氏
口松木弘海田松吉)等見送る、車

中島將監部隊、部署を定め、午後五時、諸論まで、行
津、[illegible]、部隊、西表[illegible]、[illegible]、[illegible]井
関大尉、車中[illegible]、柏崎に
り高田城内に入る、[illegible]
連隊を語る、[illegible]
井、中尾鎖江入江三一[illegible]
廿八日
晴、朝七時上[illegible]、[illegible]、砂山峠
金津八一[illegible]、[illegible]、[illegible]
横木尾を警備
子を茶屋[illegible]、[illegible]十数枚[illegible]

狩に入る、冊美原平に出張を命ず、

廿九日

晴、當隊[illegible]村家[illegible]、
山田と国吉代主[illegible]二十名排除、京平省
[illegible]、国吉代二四十戦[illegible]、内[illegible]
[illegible]、自動[illegible]
[illegible]、[illegible]、三三八以下[illegible]
一尾[illegible]、高橋義[illegible]、横井
春四[illegible]、[illegible]
[illegible]、午後出[illegible]、二三の[illegible]
[illegible]、[illegible]

婦子、内藤人寛、吉村を始め、増子
喜一郎、青木、庭の手入終る

三十日

晴、郵便物、紙、配布通知来る、高橋義元
出京を報し来る、水戸楽江巻五一月以来かゝる
こあり、清水、内藤来り、訪物を贈る、関大尉
始元、内藤典五郎、高家、来る、真へ
出往次郎、佛事、葬式の礼状来る、お通
者平、来る、今清八一、ものを贈し、印状
三枚を送りし、蘭八の刻を訪ふ、関大尉

廣井一郎、来り、本を出すある、校正河
内宗次郎、織維工業会社創立の件、打合
旅、教業本郷、到り、珊瑚を訪ふ、国
書を贈る、今朝、秀吉、美食に招ふ、
業務未完方、紙、且つ印刷業、協
議す、

三十一日

晴、内藤、自転車を授ず、関大尉
高橋、義元、来訪、石橋記組
四月号、未完方、午後、高橋

義長横井左兵衛高橋源八郎
長谷部平兵衛、敵方田沼主殿
爲神主ニ仕、城ヲ城ス、高橋
物見、殿村後ニ三ヶ所
并ニ湖水辺御宮
立田御局、真崎
丁番鍋屋別当
無僧早く寝ル

○六月

一日

晴、九時前地震ス、殿村ヲ出ス、内
藤と電話ヲ交換ス、内藤の自転車ヲ
校ス、文林堂活版所の材料ヲ搬出
二十台、豊田織山ヲ五十分間基道乗
送の件ヲ打電ス、十時ヲ出張湖畔ヲ
回ル、銀し流船ヲ見ル、湖畔中帽
子ヲ校ス、村ヲ校ス、義八木源一
郎(幸織)来訪、内藤の自転車ヲ校
ス、秋田菊吉来ル

時、豊田藏山和尚の葬式に参列、直路桂
浜中に赴き、私とともに、山内侯母堂
の義子士行侯の墓に詣、森脚義
樹種村宗八郎、山内侯、主従合計十
四人なり、内藤の墓前を経て、午後
三時八幡宮教会部校に参津八一氏来書、
直ちに書を投ず、参津の嘱と云し二
三紙神戸に、三枝元右衛門来書

時、切手文無海陸の船を雇ひ、内
藤文言、森脚義樹の
今の校正を経たるものを交付す、森
脚義樹、今夕出船、十時塩田と
共に出船アと玉沢高須西村蒲田
中嶋河井の墓前を参り、中沢夫婦
墓の傍に参詣し、午後二時に
到る、右そうそうし海義樹経言に関
し種村宗八郎と懇談し、又別紙
書状、北条氏に
リ来書、

四

時、早紀文部体裁三の命記録、高橋源一郎
来る、故吉田博士紀念録の稿を整理し
其の印刷に付すべき順序を定める居
印刷会社より人を招き印刷費の見積
を徴す、又金の紀念録に加へんとする法の
追録を高橋氏に授け帰宅せし
午後高橋を為めて碑文を推敲
前田に較べんに較と注する点多き意
に満ず、更に今一回改書を試みんとす、
金井八一来る、明日板に鐫刻よ

り世間子を殺す事多く、嬰子殺一件
早大学生の扱ひ方に関する事、又刑
法改正に関する事

五の

雨、文部体裁五日分紀録を推敲、異
文の場合に新の件に従ふ事、十時より
文部省に於て重役会を開き
き前金の方針を激し午後二時に到
又再び金井八一来る、佐藤田八
押高寺跡吉原跡三冊を渡す、一五村

同じく其筋を経て、中郡秦野村、
印刷物、死の宣告決議書を十人以来流文
来を経て到る。

一、

時、文祥海を渡り、今朝八一三寺村
を経て、高村貢山田清兵衛来る。昨
日来る事の百姓の件
つき協議、午後出張部に到る
を聞く、田山田中、文祥の約三日分
ちなる迄、えもの田と云る、行

汽船にて横浜に、又寺村に帰る。

一、

時、古沢書三高橋佩の一報を接受、
又、宮田俊蔵田中一義の公報
来る流、元治元甲子年以来
三年後、今を以て決議
其他を測し、三日詳しく神田の書
元三を以て、和田書を
東京、原左中、彦坂主治郎来る
実家、又、二人十七日忠香典を贈

来る

八日

晴、先考十七回忌に付中堂鈴法義に家族一同を招き法を修し終て和田善吉、塚内家族の伴有る田宿と電話を交換す又富士山を拝し終て二子の塚渡を為す十時頃の出本々湖畔に図書を通す紀伊に出て松表に飲し再び道を又図書を通す帰宅井上四方の訃に接す伴同弔に

帝国ホテル

帝国ホテルに宿泊し井三の塚宿の道和来る

九日

晴、豊田城山に登り来る、三の村云新来る日米人義民碑の案新に もとめ来る

重吉より来信、塚内道義家庭の伴有り夜同に寄附を為す、古池来三与

和村山形の婦を婚の、森脇美樹脇

金の伴に付来る午後数葉本々の寄宿を終て、八木沼一の来る

一茶句集正誤記を後に、行事の
俗語八一ヶ所、廿間八ヶ所、落ちる余の用印
三顆参考に為特書列記す。行事両

十の

梅雨の訪れより始の雨降る、今朝八一と
迫者を投し又茅八ヶ四顆の印刻仮彫を
もとに、出版新の事後に始めて冊美
帝平ヶ年事者、村井紀行手記
明ヶ天ヶ月末紀の紀手者
入、山崎延四郎紀行出版 米国人

越ヶ月末の紀行原文、牧義の印を検
出して寸珍印譜を作る、行事の今諸
差改ヶ事者

十一の

雨、坊雨家庭の件ヶ山田氏、
お出張、張茅を紀の若干の方を
婚礼又市雨の出ヶ者を婚の
正年情書、今朝八一ヶ茅八刻
料十四日為書ヶ、国税十八日
紀行道後 出発 五日紀行

海、素堂義府寺に行、出会ふ
並木花こと寺町列り、午後書の終
爲碑、拓本を試む、書多き湯す
時の夏を試みんとす、夕刻雷時
雨到る、

十二日

雨、次に五巻を書写、北斗七星二千四百を刻る、真時社次第
贈を贈る、横井春雲氏来る、
紀念祭原稿到来、実に有益、永興寺

東京帝国大学

東京に於て前日の書画代百銭
清水、坂口に送る、送る中、江に交付す、古
池書三、書珍墨帖二冊、新春賀状
代金七円拂原、素堂俳句、清水
書を原本清水一行経折帖、遠春折
帖三、馬琴書簡、才麿巻紙軸、雨
中散策、雨の寺を訪ふ、くる、一
巻の句を初しす、清水一冊を低る

十三日

雨、坂口直清と寺町を巡る、北斗

金額五百円迄金、外文書に佩文館代
殊金二十四円拂渡、尚四次災保険料
限り後の分代金八木竜太郎方
拂、此年三十五円の内引三十円を
差引残り五円差渡、古池書三、二三
の幅を高らし来る一幅あり、文林
陳場の絵を作る、関太郎氏より来書、平後
大隈侯事蹟、大隈侯畢竟を
賜ふ件、関氏、畢竟を
三時より森南蘋、文庫播磨の
図書鑑場合の絵を見る

堀内源蔵と佐藤の計画中
より清義図書を鑑定、堀内氏
次て堀屋大屋の部屋を宣言
実行つき金五百円を
金を貸らき大阪決する所あり余
先の絵画を帰
より物書

十四日

雨、寒冷秋の如し、文林陳場百四次後
教の分を行し、清書を清書

めめを[illegible]出一二寸底を[illegible]、船
産物[illegible]の流動を
又[illegible]石[illegible]上[illegible]
議、

十五日　晴

時太池書三二三の帆を[illegible]、素晴[illegible]
[illegible]を市村國四郎[illegible]の件[illegible]
[illegible]八一[illegible]事[illegible]、又林の[illegible]を[illegible]
[illegible]方[illegible]事[illegible]、校友伊[illegible]成幸
上野喜次治来訪、午後大隈邸[illegible]又の[illegible]

今の第八田茶[illegible]を[illegible]、小池鉄三
杉森喜治[illegible]の請渡[illegible]大隈[illegible]
[illegible]鉄[illegible]
[illegible]名、十津隆一来
訪物を[illegible]、[illegible]
大隈[illegible]
[illegible]を[illegible]

十六日

西、廣井一小津隆一山田[illegible]交
来訪、井[illegible]廣[illegible]平[illegible]印[illegible]寸[illegible]

五冊投函送、又二冊を五峯と送る其の
以義印の印影を請ふ、森脇今朝来
来訪、文書を持し二回分る、午後
坂西道逸来訪、余の新宅へ登り
居る旅又ハリ込帳四冊持来る、其内改士
紀念物うきを印刷分配すること
相図を受ける、印刷分配土地縁入の
件有り、晩る郵便と数来回書を接
受する。

十七

時、朝来を謝して其内容の概要の件
書教授を訪ふ言に湯さんを降沼る
きの祐ハ可ならざるものを要求を定め石
ユハ郵送し、又言語義長に一書を
為す、十一時郵便局に到り郵便
を受し、二時より回書郵便局の事件
新田保孝と文部省に行き文部省を
訪ふて活動する事多分と、後ろに事多分と
坂谷の活動を今日を為すべし、蓋し実
行の件、夏期講習のものを坂宅
して送る時郵便村井方に立寄回書

十八日

晴、石工魚屋に行く、終日神事を心配
する、地蔵、[illegible]、文林軍務
九日合戦、高橋義彦、印藤
冊子を考る、収義印の印影をもと
む、今晴八一ヶ月東京八二ヶ月
一ヶ月印参刀のよし、其印影を
送り来る、今晴ても地を出す、高
橋源[illegible]書状、昨て森脇来る、午
後書の書庫を清め元千の図書を講
じ現物をしらべる、石川太郎（茅八）来
来者、

十九日

雲、七時頃[illegible]の件を清田杉山森
脇と協議、男を主に論ず、協議
二三の者庫を清める、正午帰宅、茅八
も参刀の印四類到来、謝礼を為
す、午後森脇今朝[illegible]、直降く
子宅内に行き出産祝物を贈る。

午後又小田に数業園寺を訪ふ、高稿
浦一帯遊歩

二十日

晴、来客早朝来る同伴山崎元宗氏を
山石川氏所に訪ひ夫日十三日文的場今の詩
流を伝新し其首流をのもうこと、古池
永井雲海の山水幅を新たに来る示す、
十時ごろ印刷屋に到る多部をたる高
橋義長ごす珍ちに樂浪遺印を捺し寄
せ来る、寸珍冊子に抄録十数枚、

二十一日

曇天、早朝村員古池来る、雲堂
幅を古池ごと嶺山代僕しゆく夫入井に
幅老子、市村関喜遺寄贈の体を来
訪、殊に林田源ちゃ同し体に付まる十
時ごろ数業二三の寺庭を訪ひ、八月廿
二日に飯しとうこと、行ふ加賀屋三郎左衛
来訪

二十二日

雨、山田信長来幅美樹来訪、文来
の行二四日ごろ来ること、寄信

来る廿四日、彩雲閣印刷所にて、午後本会の書物を紛い珊瑚閣に表示の
拂を受し、三時、上野の湖心亭（美術亭）に四
書、絵画提出版の件、内務省美術方面の十数家
を会し、余と正木、三氏、監督として出張し、
斡旋す、此の図像は、本会の関係
する南北社の出版に係るものなり、十時頃
散

廿三日

晴風、朝来、本会の場合に関係の大隈侯

書状二通を認め来賓帳を拵き交付す、夜
月十三日文部省より諸流会に場内出演に
関し一書を受る、所有の四場士絵巻
物、拡充すべき金子、諸流茶記を校正す、
小人江会社の件、有志社、会社、会社、
社寺奉集金七百五十円領収す、五十嵐
浄念寺豊田勝治、墓碑、改修、有志の
附金四十円也、郵送す、村井銀行、金
弐百円也、送る、午後寺拝、本堂の
工村山又三郎、五十円寺内寺内代拝、松文
堂、二円上、二十円拝領、二円、永楽

但し御新を[illegible]し印刷今紙の[illegible]
統[illegible]あり、山形市伊藤[illegible]
んぶつ[illegible]を通到来、夕刻[illegible]
[illegible]

二十四日

晴、五時前起床、数時[illegible]
を細書し一帖成る、印刷今祝[illegible]
る、午後[illegible]と[illegible]
文求堂を[illegible]江戸[illegible]の錦絵印形二帖
を購ひ、便る其内也、[illegible]
とせ[illegible]地方[illegible]珍[illegible]
[illegible]中の雄也、[illegible]村[illegible]

[illegible]子恩[illegible]画帖屏風等を[illegible]帯、[illegible]印の
世話を托する平山[illegible]に[illegible]ことを約し[illegible]
[illegible]、西茶[illegible]、細英を[illegible]す、
茶の[illegible]ため新[illegible]を換ひ、[illegible]
[illegible]の[illegible]

二十五日

晴、印刷今紙を[illegible]を[illegible]
雪[illegible]帖張[illegible]井[illegible]田文[illegible]す、(三)村
来る、[illegible]
[illegible]を[illegible]、前略[illegible]

の子死亡す生花を献ず、真澄之
らも果物を贈らる、支那人伍喫多金亭
附金弗三四合納之、数業者に
を遇す、太平廣記を贈らる、真澄桂次
郎（菓子二函）より贈る、獨逸時和
條約調印の確報を報ずる、世界溯
く太平を得ること、なる校も地球帝と
際合する、早稲田大学らも廿九日市岡氏に招
待状来る

井上氏

曇、山形の海辺徐方らに書状を認むる

果物を贈られたるを謝す在上海井上氏に簡し碑
文の内二字訂正の報を書す、小田嶋桂吉
に簡す、平山君を招き高村らと花軒の
方面を散歩せしむ、高村詩を三首の
往来を作る、来賀大学生夏法、
七池らも学生尾印桜井、東海林
菊亭花寸珍抗を
状を送る、内子をして江都清天の庵を問
はしむ、彼方に帰き出る時地の面也午後
ゆく住み面中数業四方を過てこくる、

廿七日

晴、古池書三ニ参る、小倉印刷代金十六円
拂済、高村父子来る、森脇又来る、市村
英雄新ニ南切祝ヒ一名四面鏡奇譚
出版の件ニ付来訪、午後高橋方ニ行き
る、陸軍帳簿残金五十六銭豊田減山ニ寄
附金の謝状来る、午後数葉珠洲
岩ニ五ツ久文自筆の所ニ七冬
個庵自宅ニ行き
住社ニ株主総会の通牒到る、

廿八日

第九の神田南切祝ヒ市ニ行き孫
国吉を連れ十時ニ出ル、午後文の場合中元午前ニ森
井五郎也、午後文の場合中元午前ニ森
脇を招き協議す、小田嶋桂吉ニ来る、

廿九日　日曜

晴、早起す玲本ニ物録時を稿す、表紙
ニ書主淡世稿四高龍伸彦ニ送る二三を抜
す、古池書三ニ出版印譜を焼く、十時ニ
り出発、関大学ニ行き、再び南切祝

の国芋を二三の方を始め、娘共人のため
めに傘を拵へ、見物に行くと、山田氏
来訪、後藤多市氏月分配本し来る、丹
美庵主おくられ来る、南北社の高橋嘉郎
武来訪、猶四時共八の媒和條約に調印済と
んと世界義平也、森島桂雄氏帝劇
の法師芋を切符を持て送り来る、六時ち
往観、この間日記オトシエリエツトムロ見えし
十時四寸

三十。

拝殿豪雨あり、六時時、古池素三氏前田
畑雪寸珍峡雪帆氏来訪、金十二円新に山田
印税此度の内八円拝殿菊花を買ふ
寸る十珍書新義三個酒盃を拵す、
観仏堂を印を拵す、高村文子来訪
内藤久寛義と平山雪太郎帆を奨
大隈侯を訪ふ文部省の事を云ふ、
午後文部省の場所のことを云ふ、
宮其年南を拵ふ、帝国通信社元編後
動揺後更に改造社を出す、
寸動、謝金金六十円銀取文部省

金壱分ヲ以て藤屋五十四方ヘ切手ヲ頼
らる、

○七月

一日

書を世界の平和を祝ぜんとの意に因て
を掲げ業を休む、朝早く新書冊を著し
供物を神前の書斎を設ひ終て平山君を

訪ひて寸紙数二冊を贈ふ(五十四)岡村よ
り依頼の件を話し三河屋と談し一の坂宮、山崎君次ヲ
来訪多の話、真野虎城氏来る、
三浦氏世盛を伴ふて地を贈ふ梁生
氏、中華中華に帰りたるる、
分義業仕事話、

二日

六兩江部湾夫保養地方面に於て
朝来る村又子高橋高郎氏山田伝

久須美秀三郎殿より、午後五時頃迄の約束にて、帝山丸の内容を聞きます。帝山丸の内容を聞きます。

巻末に信濃毛利家の図面あり、内容を聞きます。

右の書類、兼て紀州藤田伝三郎殿の書類、兼て紀州藤田伝三郎殿

三月

紀州藤田伝三郎の名を聞く、古池素人魚住荊石の山形帳を拝受即時又、沖隆一郎氏、十時氏出版部の重役会に於て、今の所製の図

部株券五百枚、五百円券十五枚即七千五百円也、内三十株乃五百円券三枚和親に振り替え、重役会に於て出資者として出資者、門外に出版部を置くこと、なる、出版部の用務終を待つの者と二三の同志とのうちに高橋義雄氏なる者、丁酉倶楽部なる者、午後又文部省海を著し三回

四月

雨、菊池惟豊ら翠峰画語を贈る。古池孝三
長摩海田の紅葉の幅を贈る。婆々婆
ゝ田也、山田佐、広井一郎、宗八、伊藤
義章、森脇美樹、来る、客数人後藤田
の書を送る。夕、田村士郎会、物山の件、来る。
一印、吉田博士紀念碑撰文の稿を校正し、拙稿撰述
す、

五月

晴、丁酉記行、五月田手紙長入、幼況

六月

六月朔、田村今郎、田中稔、樹樹
来る、紙幣を無未完来る、十一時義
会の義に到る、真野中学を招き
酒食を出す、完又到る、車夫を後
し義りて帰る、夕刻田中来
りを清す、夕刻田中来、只此中来
絶し死来る、夜に入り雨来る

二日 月曜

雨、文来陸海を来し、二四分長つて義
す、佳ち光子を送ひ、祇園に田吉を婚

ひ渉叫金四に飯し法勅宮を心とんしこの
へる、高橋義孝氏らの銘子終焉碑に
叫ちべき銅版墳志自刻拓を贈り来
る、金沢寺跡元年とも魁高為の個
奏を贈り来る、今沢小一とも来書徐
星間の印影を示さる、且つ余に扁額
を乞ひたりと高の有る、

七

兩、早紀今沢小朝の書を乞ひ跋を作る
且つ一箇を寄す、菊池寿二に対年年

書譜を贈られ礼状を出す、高橋
義孝氏より山峯寺を見る、寺跡
元年に物を贈られ礼状を出す、菊
屋新三郎氏より書譜送し礼状を出す、
仏僧徒状を出す、清水創生社の事
後今に臨み年後協力、文林海添を拾
す、

八

時、板津和夫氏来る菊屋に泊
夕方三本入本来三個出来、文林の紹二

月を去つて、又文永を称す、午後
牧業寺路を拔き、若干をひろひ、
高田より前田喜男氏沿屋根板屋十書
上座、稲川つゆ、く方寺書

九月

晴、文永の船二田合ちの者、出迎ふ、内藤
の自転車の給油を補充して東船橋
迄、伝、未渡邸、市況を見る十時
より出て、の立庭を拾ひ午後
出、田中在一方に約手の金額を求る

為替証を渡す、

十月

晴、人を使て庭中の池を浚ひ、汚物を
拔き、伸うれ十う一を取す、市区役所行く
千円八万円約手訪問有之、六十万
の手形差入る、森脇移巳文吉屋の
件、ゆ寺伝、十印捺印三十
顆と高らしめる、いまだ婚姻の如き
ず陸り、吹上、拾人士師
の書、紙を焼の代、十五円拂う、文永

の船一日分比叡丸船長（菊池）、乗組員
十名ばかり来訪、帝国商船
の石鹸、光明丸船長、市村英雄氏訪
問する、高橋源一郎氏来る、

十一日

晴、古池寸珍本州四郎諸氏来訪
蜂又来る、傳兵衛湯、文林堂源一郎各来
しる、湯殿出月来る、鍋屋古書
附氏来る、数冊第二三の書を買
ふ西田伯来、高橋義雄氏四来

ふ出来、四十大ふ報ぜ者来る、西
条出来く生北出西ふ生、午後（雨ふ）
て茶後、根を市ふ、村井弘ふ
生ふふ四也ふ十ふ弘ふ、傳入ふ
三ふふ再び外出、根を路ふて義雄湯
ふ、寝後雲ふ生ふ報ふ本四伝原
午中を多しふ根九ふ死ふす
とふふ

十二日

晴、文林の船一四分社ふ、投す、

書信を元に戻す行一箇を案堂に投し
葬式の世話を托す。三重殿代御士川崎
氏より御信書の御礼を述べ内藤に託
仮状を送る。高田侯雅楽信義元氏
の件に付書状、御用掛りに託す
き紙金物の義図を書す。湯殿出来
法、古池書三ヶ寸除御諸二枝導入。海
田帰代と共四十一回排泄内藤に書状を送
す。午後本田信義方へ帰宅。金五円貸
典光寺、流茶を数束図書を送もう
る。桂舎に書書

十三日　日曜

晴風、川崎氏今朝八一ヶ来出、並木
氏来訪。於他する多度へ、ヶ来遊
十七株改ヶ植する。印刷池中に繁茂
す。表を見て花ヶ苗を繁出来
る。馬場氏書簡、高野氏、句読抜
帰いまゝ出来。別紙文稿原一部来湯
午後高等商業二の機械講堂に於て文部
省の講演会を聞く。山崎博士の
講演二時間。大隈侯の演説、博士の
講演二時間。豆子大隈侯を訪問

終日仰卿、今日相逢て閑会、午後伊
内山時を伴ひて来り、明日出発に晩餐
を勧めて去る

十四日

風、孫井忠一父子来り紀念菓子
二箱を贈る、森脇来る、大隈卿に呈す
る論説の謝を述べ、夕刻帰る、午後閑を得て茶後
して十二時頃帰宅、午後閑を得て茶後
弱を飲し後て鴻巣に数菓例の如く
回書を送る、

十五日

晴、第尾氏より磁器製用大鉢を
贈る、池田孫一来る、十四時帰去る、
雲龍丸三ヶ月分納る、午後庭樹の
手入を為す、夕刻高田前路と上毛橋
川と合して府前島男の紀念碑論墓
に参拝する都合なり未後帰宅、執筆
をなしたる都合なり四人九時に来る、
夜を徹してもなお的物也

十六日

時、前時男児金銀を以て作られ、有男
爵事務官の自筆の和歌俳句一枚
預る。東陽丸乗組の人々帝国郵便三等
郵便局の自筆の和歌、俳句、帝国郵便
午後、文林二の分を持参し投函、こんぺ
る二十五回と云る。与謝板垣蕪子、与謝
蕪村物語完と相のる。万科玉典と勢
力一致の幹部とせし祝盃を挙ぐ。原
底平、ちもやの已に萩角兵衛と書
名する古文の書簡一通を発する。この
萩と云る人未だ詳つまびらかず、其出や

時、俳句の意通、其事活、十句の歌多数
意の切字を略する。

十七日

時時、朝来雲の到るもなく、文林時語
二回分を終し地紙、行物、はるる
午後雨、雨を日花園に流し、雨絵
原田の青物を洗ひ、国旗を掲げ
る。今朝八一、ちもと事吉日の橋忌の印を
時、浜崎墓参に行、橋もんことを依
頼して立ち、右印諸を終り来る

十五

晴、古池書ニ記ル翌峰の長條悔悟来、
往村事務前略男紀宗郎の子孫を招
す、亨の後雅所の田信義遺族の件と
付事法、共進し略す治平路を示す、
今津八一ニ寄状を書き、午後の病卯
刻出発ニ到り手紙を見る、親之侯族
の噂絶有未新ニ、知り人今此八共新
ニ分之元ニ、度を太る一のを分ル等の
形勢也、今今此の問題ニ付こんな
り、東京まニ寄を教ま、四時ニ出

十六

陰、書ニ記ル所ニ拠り西野寺前一基
句碑を撰ル碑帳乃美浦仙涯
小養出来、往村来訪、前島前自殺
侯七ニ獨勝言ニ面相談来
来訪、顯勇利る、午後図書を渡ん
と
此ニ、野ニ夜度の刻を続る、義
湖留を受ける、上ニ(き)ニ(ま)ニ(ま)ニ
降雨

てゝ[illegible]に到る、雷雨を下り[illegible]前の清水を過ぎ、[illegible]に一二の寺を訪ふて[illegible]時前[illegible]教師を淡[illegible]る、和田垣三の[illegible]到る

二十の

朝霧多き[illegible]、[illegible]池[illegible]屋[illegible]の[illegible]

[illegible]を[illegible]、[illegible]を[illegible]、[illegible]を[illegible]

[illegible]前島[illegible]の[illegible]を[illegible]、[illegible]

[illegible]義[illegible]寺[illegible]

前[illegible]後[illegible]の日[illegible]十冊[illegible]

[illegible]が[illegible]屋の[illegible]と

[illegible]冊子を作り[illegible]起[illegible]す、

[illegible]の[illegible]の[illegible]

三十[illegible]年[illegible]

三[illegible]出[illegible]の寺[illegible]を過

り[illegible]上[illegible]特[illegible]を[illegible]南北[illegible]の

[illegible]、

二十一の

[illegible]、[illegible]山[illegible]行き和田垣博士の葬

式、恰も、石塚氏の印刷物を出す事、
後上弘義、[illegible]
し者る、[illegible]
別る、[illegible]
[illegible]
[illegible]

二十二日

晴、東郷大将の南洋艦隊死亡の報到る、
税金十四円六銭納付、古池寺珠抵を一緒
[illegible]入、菊花を高

一来る、経費、前の通り、[illegible]
勝言の[illegible]支付する、出版部[illegible]刊
地[illegible]拡張、配本、[illegible]
四方を[illegible]る、

二十三日

晴、[illegible]サンフランシスコ
山崎恒四郎の[illegible]
印刷[illegible]を[illegible]
[illegible]上を[illegible]
工場に[illegible]新し一[illegible]の[illegible]

流を汲む、四書類数果沢田の書庫に図書を雑の、

二十四日

晴、夜井一来訪、六隆一ゝ来書、七宝
組の三号用手形印刷を了す、古池主る書冊代残金
割引を了す、午後吹田を伴ひて本町ゝ紙
問屋学志を数果物を購ふ、

二十五日

晴、前略俗事物前略甲乗書同主題弱ゝ、又高田ゝ使来る
前略高及所一来弱ゝ、高橋源一印刷所
田畑士拙宅終局碑の拓本を拓来
豚肉物を来沈、前略高の清書
を寸略冊子ニ謄写を始む、印刷屋ゝ
走写を拓き主田の紀念紙ニ書ゝ、古池ゝ
雨谷の小書冊を購の、小物印清巻代償の為
ゝ、

二十六日

時、坂上弘義氏来り、日石会社より配当金を受ク、二割五分、株数六十株の配当金二百三十四円三十銭也、清水痕を抑ル、時を移ス、午後の生田書を婿の伺書後藤印刷会社に親立新撰之に位上の要求起り出社協議ス、高橋義三氏来り活版印刷会社の設立のことを話シて帰る

二十七日

時雨と未だ霽れ来る前時雨の降ることを来

紙やしの二時頃に成る奥田貴志氏来り物を預る大池事三百五十本四書六冊持参第中のものと別本のつき婚入六冊持参桂秀来る、午後五時頃の立き渡る印刷会社の河野とつき会社と電話を交換ス、植物会議の投票あり夢之助来り応援を捨して去る、田中惟一郎来訪、河内長次郎出京届を預る、高橋義三氏来り事務を預る

時、杉山孟義廣井一大夫森鵬益本
事務文部場合の新部をもつて
幕決幕を決し十一時と別り、時間
合戦の金後屋と時々職工場銀行殺
を決定二時帰宅、新聞編輯当り
事者、河内廣治郎小本源一郎其頃三
時ごろ五時迄本々を敷第同者を解
屋をつくる、新事情を別る

而して新八時前時頃大隈侯を訪
て前時前の後藤を訪ふ、偶ま高橋
作衛事務時事問題を論議す侯の
り廻刊の書述二種既る、内閣新聞
死亡者弔祭を見る、直ち時政党
八幕中足高しを者祭を
降に屋を高
後を乗る、内務大臣
大らうと事者、而市、沈めと共に淺
者に通信法動言
也、

而して、朝鮮客たり、文部
陸海を録し午後一時迄帝国を休憩す
雪合第一終りて正に、午後第二位
及び第一組の二敗(東吉)を分ち一二
の者を勝ちて之を大親戦
等所を生ずる千円迄紙さんとせるもの
大県郡く為相考る、京城源一行も来
者

而して、往年文部の分担の金額
(詳細は別表)す、京城源一行大
を分与を為す、の清国出金額除き
残八、義会社営四千円利子年賦金前金
利子七百四十円也納付す、北海道一関
大学ともに本吉、文部の船を借すから
清国言語通者後出張せ所を冊
教十五を出す、外利者、都て各部
社の職工使役賃上を聯合して来し、各部
社休刊を発表す、報知の夕刊ゆめを来る

○八月

一日

駿河刑部より山田信作に宛て書を送る、其の書を
を托す、複雑なる事二項、即ち新の紙を
大石久二首山田誓書、文林の行方合点
を送る、文林を紹介を屬す、駿河午後
猪刻より池内張る、小倉隆一も来る
午後紀伊文のみお出、終日降雨

二日

雨、森脇田村文の所用の件有る事、

文林の行三の分を送る、小人江戸
一来る、即刻分配り前金を送る、その
後を為す、紀伊明後日出発、
中村田松を出発、
めとなる、三日出発せ
ず、仮宿の月番を
夫ともに来る、
冊子送る、

三日

雨、佐々木義邦来る二時分に帰る前時
前の色を海坂者を知らせ、義邦云

て後前島密の貴書を除し其の時
間を探し送て手紙の代料を、郵便の
休刊はなるのこと〻天明晦冥何等も知
る能はず、帝国通信社にも代て
とて通信を郵送して来る、午後田中准
一印来る、続て中村康一郎分部来る
又午後より雨雨降り晴る、

四日

雨雨降り霽る、拝啓微弱の地震あり之を記
す、いまだ刊行に到らず、今津八一三間

に前時清水の俳句を送ることを
依頼す、其日高橋沼の会場につき三上里
板垣井の、甘方加賀山市郎を訪す、七林
高の時雨庵に寄り板を訪し本田農商
長張板助高附金募集の件を云
ふ、又俳後高橋義を訪す、
帰す、十時過外出田村を雇ひて四年帰
宅、釜山寺西村真次の方訪る、
帰宅、報知新聞刊

時、風、谷[illegible]開刊、中岡出張
中の淀田博士[illegible]し来り、五十[illegible]泊会寺
後宮の訪別る、拔拍[illegible]後の
来り庭樹に手[illegible]富を[illegible]、石川世界ハ
銀象牙印石印二(印刷印)の刻を依頼
す、拓文半ば[illegible]
八七枝、二十五日拓
者に影[illegible]印譜(提堂所蔵の漢印を
摸し[illegible])刊を[illegible]す、雲舟[illegible]
[illegible]拓者に佃英菓子を贈る、

六日

晴、[illegible]の[illegible]文祇[illegible]新[illegible]拓、拓縫に地
来り二三寸[illegible]を贈る、金石[illegible]、金山
祇[illegible]、[illegible]陰地[illegible]
[illegible]、関[illegible]、[illegible]、古地[illegible]三[illegible]
を拓き、午後、小又江海[illegible]
[illegible]、河内[illegible]の[illegible]と[illegible]
[illegible]、[illegible]訪

七日

晴、[illegible]後雅林縫[illegible]
協[illegible]の件[illegible]、[illegible]来賜[illegible]訪、[illegible]淀[illegible]寺

後世多事ヲ物語ル、三田教師、左
美山海田和氏ニ書状ヲ送ル、石川蘭
八ヶ岳東方眼ニ見ユ、印刷ノ雜し
と云ヒ帰宅ス、夫ヨリ中谷氏夫ヨリ
書、十時ノ出京ニ間ニ合ヒ海ノ波ヲ
教来ル、ヒルヨリ、晩香校閲ノ報知ノ
山崎恒四郎ヨリ美作ノ報知ノ

八日

時、業務ヲ休ム、用事ニ和田印氏ヲ訪ヒ
刊本、玉海洋行ノ話ヲ聞ミ且つ相談ス、山田

酒を飲み年睦四郎と称する、文政四年
[illegible]新新[illegible]清し出[illegible]
と同寺[illegible]清し[illegible]
然同状を[illegible]、於[illegible]
山[illegible]を[illegible]、於文政[illegible]
菊池[illegible]二の[illegible]
[illegible]の印[illegible]を[illegible]
が

十日

晴、往[illegible]の[illegible]を考し言

家を頼り、[illegible]事[illegible]
[illegible]の[illegible]山湖印譜を[illegible]
[illegible]土未[illegible]
[illegible]原一[illegible]
[illegible]を報ず、文林法[illegible]の稿を[illegible]
成る、[illegible]別荘の井戸修理成り[illegible]
用三十[illegible]
[illegible]

十一日

晴、早朝[illegible]本[illegible]郎事る前時[illegible]の

遣ることもしも、箱のことゝつき
堀屋角兵衛と二回伝を交換す、田村氏
る文内堀屋すると云ふ、文井の所
も（ゝ）ゝ者美）すゝ、故に五峯出京来酒
肴を携ゝ、四年の出女児の為めに婚を請
ふ、高須氏は本書、二十数年前の旅業
を捨し文井の扶料を授ゝ、

十二日

晴、古池素三、二三の書類を持参紙講外一
箱入る、内義久竜と書る、其後より
二月十三回忌の第子別来、故に五峯

来訪、又山の仏壇、西江利五郎
行中の堀谷美之丞より伝言あり、後ゝ
清兵来る、文井陳次三日分帰し
ゝる、

十三日

晴、文井京弱に分ちゝく書（ゝ）故に
五峯来訪、高須氏の紀念祭につき
来る、内義久竜に吉状を書き事
を伝す、午後、文江利一来伝、
旅館中ゝし前清男に関す

杖拂を換出し仏に未護邦と
称し、真珠峰樹沢印く封無十
三四長二分香を焚くを者と多し、
今深八一銚子の本木を煎じて茶と

十四日

雨、丹美原平と共に文井の原稿四四
分形しうる、元んうを百五十四に達す午
後雨中光児を伴なひて谷の山村に
光の為に帽子を編む、帰路香々の珠琅
閣に立寄す珠玉を拾ひそうる、

十五日

雨、光子今朝軽井沢向つて出発す、日所
安の大学の寮食の月末迄在る都会地文
界の形を北海道形容す、土用潤
市村英鶴と共に寄井一本浜、塩内
道遥に拓し生る山鳥屋帽輝を毛成る
山田信夫氏の急、日本人移住と移民
生義民部の宮寺の案を立つ、十一
時激震あり、両条北東く金二十
四銭送す。丹美原平と金の
沖縄を求める位つて五光六

艶と冨し写四冊を一帙とし包まる
物なり、午後の出四五の寸珍を獲のそこ
へる、

十二月

朝来冷氣秋を感ず、今津八一来る
書、石川甘園八ゝ小下駄印（春城）を
贈られる、（今津氏ニ石川ニ差出ス）
茅ヶ、元吉元次郎十六年没既せる墨外
史の注を齎し来る、大概文長杉山
金吾ニ落書を附す、来訪今藤氏来る、

文林の移を属す三回合成る、終り低氣
壓ありて次第を接し、前後来
今月日記の書刊る、又佐ニ木護邦
ら来書

十三日

低氣壓来る、五経井深光子ら
来書、今津八一鉛子本木亮・花ら
来書、文林の移三ヶ合長高郵送
捧受七、日本良犬ら作り白石書
巻の鍍金を乞ふ、京橋通ら来る

書、おそう家石文郎を移し二回に及び佳
ものやむ、十九日夜行に昨日を付し高崎
山、出発と決し寝室巻をもとむ婦子
表一方未明を以て出発する、

十八日

雨大津港一泊なる迫若を踏る、ちつる
、天神屋(新宿)五十四回に到る、朝食後
高田を郵送に託する、高田
に於く金(中)京都に帰る、帰途新橋川
伊勢仁前の鶴を訪ひ其帰宅

を[illegible]く、必難所の三峠国一帯苦ら
い[illegible]、国市線を京電山の東
面化を元亨セル説話を、出時新
り金三百円借り受く、

十九日

晴、文郎の宿を辱し三日分成る[illegible]
、分送す、三田村元龍、大津港一泊
、書状を[illegible]、転井作元子ら来
る、市分ら元郎菓を郵送す、
午後ら[illegible]、夫西行汽

車に乗し昌とせし事京驛を見すて
行京野山に拔きて三二里越て登り
の遺骨を埋めんがなる也

二十の

朝方前京都出自動車の西を変
け直に修学院に投す、下村西方に停車
時出迎へ人力車にて寺に到る西
午前拾分の拾分を過ぎて
上に朝方後を行
四時後の京に過ぎ
いろいろ決す、山田氏

助を乞ひ同寺を過ぎ珍本荒平を過ぎ下
村に拔け辻堂を過ぎ自動車
を起し歌の中山清閑寺に到り西の月世界
海の嘉地を過ひ小松谷下村を過ぎて
午後の飯を喫す、午後一同出て鳥部
山西大谷を經清水を過ぎ西時祇園
に入る、時の高野登山行路の順序
を調査し終に大阪へ出て御見橋を高
野行電車に乗ることを決定し寢
に就く

高野登山

時、を起き出て起床朝食を済し其高
野へ旅行を見す、去る二日、堀川伊
藤仁兵衛氏伊藤顧也元高田屋嘉
の書状を右に托して持参せしめ其翌午
前出行の事を報しめ車に入る、六時三十
五分京都驛を出し大阪梅田驛に
着直ちに乙の乙を飯の乙疾走潮見
橋に到る、大阪市の一端にして一端に到る
此る人力車に乗ん心一時間を要する者
十五分間なりとす、賃錢七十四銭也

我也タクシー云俗也、汽船橋電車
車場に茶店あり、そこに憩ふ間もなく
直ちに馬車、乃ち投ず午前八時二十
分也此電車橋を渡りて和歌行の鐵道
に乗換る、此間約二時間近
年此電車の開通せるハ高野行に
大なる便利を與ひたるなる也、三の市街を
経て漸く山路に入る也、三の市街を
上りて、天見なる地見峠に到る間三分の
の隧道あり、九時四十分橋本に達す、此の
沿線又千早城、河内の歌心寺等に入る

入口なり、長四と云ふあり一帯の渓流あり
山に遮ぎる山麓酒橋を記し、大改人香魚
を網するけんあり橋もしもとハ竹の多しと云
ふ文器を証するもの
今ハ北条を発し、和歌山行の鉄道となし
高野口に到るを便とす、高野口より椎出
まで乗合自動車あり僅うに十五分間
を達すこれも又甚便也、椎出より午後
を期し十一時半籠輿を飾りて出発
えんとす高野山上迄三時半間半乃
至四時間を要す、道路ハ大正三四年

大師千百年祭の御り改修し旧時
の険路を避け迂回の道路を造りたる
ために里程延びたる大登攀の難を
減し、三人曳の人力車にても登り得
し、但此二三ヶ所険阻なる所ハ
徒歩行を厭ふ人ハ五人の車夫を役
せざれば人車にて絶頂に至りがたし去
れば道路ハ改修を経たりと雖も未だ肩
夫を閑却せざる迄これらの所ハ
のこれる今ハ甚だ便利なれ婦人小児と
長七㌫脚力他にものハ徒歩にて山上に

達するを待へく北の七多数の婦人の後ゆ
登山するを認めたり、神谷と云ふ村なり橋来
を左側まゝに上る、極楽橋と云ふも八分ハ
仮地もとの儘、道路改修の結果往古をう
へ赤く塗りたる新橋架しあり、流つて不
動院ここゝに、北の院ハもと登山中元も
難険とせし所なれど、鹿濃日光を見さる
橋来中を行き輿中（往年登山の前ハ）の客ハ
改路の急勾配の苦しんで却天に冲するこ
とゝなりしが、今ハ迂回の路を造り斯る難
所を避け為時のものと比し難易四のの後

ゝ、二時半山ゝ女人堂に達
す、女人堂ハ寺坊のある山の入口ここゝの関
所あり、往年登山の改近ハ婦人の
北の関所内へ入るを禁制せしゆ今ハ自
由を與へるこゝとなり、真言の宗法と
ハ云へ男ハ女人を嫌し他方酷甚なりし
こと女人堂の位置と共に今更ら感
ずるなり、但繼いで非常の険を冒し僅うに
登攀、寺坊のを問へ、人の間に元得る地
點まで登るを許し、さんざんとして入るを
許さるゝ彼等の労に對し真に酷な

りと謂はさるを得ず、但し南の僧も
婦人と合するを忌み、婦人と合するは元の
袖を以て面を掩ひ世人も僧と合することを
忌憚しなりと云ふ、今芳のおもむく
の如くなり、肩夫さく芳し大師はなるる
を先見しとすの五十年を後七千年
の後大能現はるると、今婦人の登れ登山
するものの乃ち大能なる無んやと、余も肩
夫の言に同感するを得さる也、三
時寮竜院に着し、内森久宣らもの
添書を示し、こゝに児童の遺骨を拾し

為端の指図を執らんことを欲し住職
面して種々語りなる處、住職は余の姓名
を知り居り、貴家の御親戚市場徳次郎
殿は清浄心院に宿泊さるこの事なり、
縁故を重んずる高山と称ふは縁故なる寺
へ行くこと方便なし、尤も貴下に於て御厨
なるくば本寺は御投宿の命令為端の取り
直を為すも差支なしと云ふて、何とかして清
浄心院に遠慮の様子なりし、自分らしい
折角高寺を指して登山せしものなれば、こ
れも因縁なれば貴家の縁を辿すると及ばず

と一出し、ちんぜん終て清浄心院の方へ移り
ごとくなりしが、寶泉院の住職も清浄
心院とは深き因縁ありて、清浄心院は別格
本山なるの鍾田大僧正はその住職なる
とも他日の住職として寶泉院の主僧は共
の侯補者の一人なり、彼る関係もあること
なれば両寺を無断にあらすこと
も出来難きなり結局とえ雪伝えあ
院の間に交誼なり、間もなく清浄心院住す
僧の方へ流遣し、移転のことの交渉調ひ
且つ其僧のあとに、墓地を巻辞し

北の墓所は今の地も無きまで霊廟として
幽寂の趣味は言ひ難き北の一区なり、ここも大正
三年各所の寄附金を以て復前の路
なりし所を石を以つて敷き詰め、美観を添
へる外、萬燈のある殿も若干擴張し
うくる面目を異し始めて宗家の墓を拝す、明治十二年今
なほ二代前の宗家なる人の建てる墓は御殿
の附属漢流の石碑あつて、表面に先祖
代々の墓と誌す、裏面に静月の二字を
刻す、これも往年すなはち一向宗の名を附

うさぐうしがあまりの僧の語られし撮影に雪の
折角建てられる此墓を毋其後取崩し
共人もよりの依頼あり仏師に命本堂に
遠慮されての事と見へたり、清浄心院よ
り色々申出し元毀の発ぐるが其除施
主の名を削り静月と改刻されたりと云ふ、
近年殁られる清次郎の遺骨もこゝ
に納むる由なれど目下其の手配中なり杖法
る、香を献じて一拝、次で撮影せ
しむ、奥の院を拝して帰路六宗家の他
の墓を拝す、この先は越前の清次郎

の建る所なれど宗鉢建と刻し表面に
多々羅の墓とあり、一時百年を経る此の
墓石を徘徊し、清浄心院に投ず、此寺は墓不甚近け
れど、寄る辺院は墓所を有する約十七ヵ所
もあり、山の一端に住して出入甚だ不便の
ものなり、寺の祝模も清浄心院に比べ
ば劣る狭小なれど高野の後備も心院の方
行屋きなるは云ふまでもなく、寄進
院は由緒のある寺なれど宝海の産石碑の
殘 潮の如寺に義なれど、宝海の衣明

を司る寺として、今も毎年の祝
を祈願する光寺のある アカ井の丘を
以てキハダ染を寺法とし、一山の末
一の法印之を着用し其の切れの残りを
以つて守りを作るとき、奥の院なる弘行
の守りにキハダ色の麻裂の紙布しある
ハ乃ち是也、清浄心院ハ めるも千度ろ
き寺院なる余等の紀室に元とろ所
ハ庭園を見時なる所の茶室と打筒の極端
り、さて程も長廊下を歩して初めて達す
る程の極端なる、山内第一の大伽藍も

へきし説あるも、現に家族多数を亡ひ
投宿のものも多く殺害の為なるべし、東本
こゝに困印しなる寶物なる為
え言のするに二ツ引の紋も寄らし其間風
なるも入らざるべし、追て冷氣を感ずる
衣類への衣時もなるべし実に高感しなり、
抜て高山の主用に祝て寺と協議し七
拾五回の格の日牌を申込み、剃子入れの
塗漆の位牌の背戒名を刻する代り
過去帳を挿入する新式の牌を寺に
置くことを決し、先ず寶香院を始め

二児機廿方唯并ニ三女澄子の戒名殺生
月俗称の釜祭を話ハ、且つ機并ニ澄子の
分骨を納骨堂ニ納めんことを乞し、影向
ハ此朝五時と定まる、例の高砂祝詞
ニ杯を挙げて十時寝ニ就く、

二十二日

晴、今朝四時半頃起床、五時位牌堂ニ
列り一時間ばかり読経を聴き終りて此
数宝あるる位牌ハ義し焼香を為す、寺
ハ特に宗家の位牌を側きた置
き向ひ、焼香せしめたり、此の室、北の室（位牌堂と呼ぶ）
ニ沿ひて長方形の広室なり、全く塗堀ニ
無数の位牌折り重なりて置かれ、
燈や献花や供物やなるも行届きた
るものなり、主僧の外十二人の傍読経し何とも
言ふ所の感ハ打たれたり、六時半位喫飯、
内ふと云さんとて児ハ日曜厨子を撮影
せしめ、寄宿舎院ハ五月の色を焼、後
ニ一泊の寄用をもて十五日の色を焼り此
度世話を受けたる傍ニも（北傍ハ東根
院住職なり）泉井数度と云年若き傍ニ

宗家のみをよく切り盛長(ながう)荒干の金を
與へたり、北の僧のあきなひもうて盛長の童に別
り鐘田觀庵と雷名の者的話を交わし
のハ真言宗東寺流の大僧正(ハ)丹波
寺の前住職と云へども実雅方北人とあり
七十餘の老人なれども壁の鍬ふるひのうち
なれ後住の主僧も北人(也)快活なるく
語りうるく此才子、寺を辞し立る的
も宗園(ら)熊と出てくれ送りとり、昨夕
豆きとりハ紙屋寮の忍ぶ(思)のりて来り
ひとり的ハ下山十時とうう、彩〳〵辞し去る、

下りハ房夫の脚も早〳〵、二時半りて推
出れ達す、北高ゝ自動車に乗る
車中一客と合ひ、其客余を知る而て余
ハ知らず問く、ハ天代(岡次)うう天代ゝ世間高
野山の霊宝殿上棟式を行ふつき紀念
展覧会をつくの為ゝ、里枝萩也
其他市大の為ゝ名と共ら
陳列品の内納べん設頭し所ハ浅ゝ陳列
の練習をうう、黄ハ残念なことと
されど、荒し此秋金刷岸春〳〵来られ
うは列品を一覧さんとうんれと、昨

来訪を親さりし夫人訪ることあり
と知るや必ず接客を通じ名刺に其人貴族
を見えたるも今日は捨方なり、矢代を父急
病の電報を接し帰京するなりと云ふ此
ニ京電ニ下車し、一茶店ニ午飯を喫
し例の徒道ニ投し橋を渡り下車ニ移
りたるも、京野辺ニ達する頃雷雨はポ
ツルを撫き新修繕を減ずるも終ニ成
ず、後発の電車の来るを待ち受け
ずニ連続して漸々発車此日を始め
徒の時刻を徒演し、大阪ニ出き各

驛ともい乗客雷雨のぬく車中まで
来て雑遊をくく日旦つ苦熱を感じ
漸々汽見橋ニ達し自動車を傾き疾
走天満橋を京都行急行電車に
投じたるも、こんなる乗客満員腰をお
うすの所もなく一時間徒行主の倶京
都なり、立ち入り橋家に別る、午時六時
半頃なる度差しく、浴後一碑
初めて爽然、たるも行と見合はせ
えず帰京と決し了はす

晴、高畑へ出掛ける、陳伊藤仁右衛門へ寄り、
午前の汽車にて帰り、明治廿四年の新年と
なりたるを以つて余一日の為に先祭典
京と決したる処、九時二十八分の汽車にて帰
る、帰宅印刷会社へ久江、新宅へ行く、
金をもとむ、高畑山へ移住の事、
を変し、旅費捻出を受けたるを有也、
去る後、獨居寂寞中を執て二十一
日以来の日誌を作る、執業中下村家
らも使来り、文房の高点を贈らる、心

午前より執業を已む、午後坂本氏
を訪ふ、五四郎の病を聞き、
京に帰る、閑臥紀行を読む、高畑山の新
を読む、信夫書十冊子に京都停車場
を経て物を入る、京の印刷会社に寄
電の事を命ずる行李の終に来る、
石本嶋へ使を送る、
明後廿五日も来電、為替（明日の曜二つき）
明後日ならば来る

時、六時起きて南溟寺境内の霧亭を訪ひ
朝粥を喫したる後、八時東堀川伊藤家を
訪ふ菓子を出す且つ大丸の煙草
辻春次郎を伴ふ、伊藤家にて伊藤廉也
と云ふ老人出て、接し、懇切に案内をなし
る所のものを次々に出し示さる、凡そ
不のもの仁和寺遺跡図書数十種
終に其の牧花の印を捺せる印譜
に自ら捺し二冊の古義書印譜を恵
まるを得たり、辞して隣の家廟を拜し

て去る、午時十二時三十分、辻と伴なひ西
洞院御所の跡冊菜と云ふ割烹店にて午
餐の御馳走を受け二時半過ぎ帰宅
る、本家にて四方の親戚便電を発す
十二時を過ぎて一の便電受領し得たるを以つ
て大丸、現金を引換を為す、午後
其の記事を冊に認し四時と成る、
石本藤治来訪、四時と成る、
急行汽車に投す

時、九時三十分帰京、冊長原平、北畠浩
四五城、笑四五浩、寒子芽子よ
り来書、高橋源（高橋鉄）、鉄の道、
紀念碑を建、今度東山道、山崎（山崎敬城）
殿石塚坊殿寺連（四名の作えうき列る、寺
四五作品を出す、五殿列る、
京都四郎後書を郵便局と出し雪花
の芽を出し、京都行く一色を
しの芽の道）還と、左紅井源の
走る走平の色を郵送す、紅井源の
しの作品を南瓜五十大瓜の芽

主婦より来る

廿六日

時、前東京紀行を録す、七時堂三来る
十四五紀念碑の事務を托す、桑陽
美樹字彫子来る、紅井源先ゆく、
色を出す、高橋紀行書畢る、午後所内
六数業一二書庫に四書を解のもつる
古四五作品士紀念碑を出来一冊
印刷紀念碑を刊（を）、内務大臣と面談
を交す

二十七日

晴、本学校和田義方ト共ニ来者、荻井伊助義之ヲシテ東狀ヲ九州ニ向ケ発送ヲ命ジ社ニ詣ス、十時南部州交尚社ニ帝国通信社ノ重役ヲ招待ス、二十第四時頃ノ汽車ニ乗ス、午后ヲ以テ出発シ夕刻ニ帰宅ス、田中清次郎氏ヲ訪ヒ、高橋源一郎氏ヲ訪ヒ、紀念撮影ヲ終ル、大工ヲシテ俄ニ新事務所ノ屋根ヲ板張ニ改ム、

二十八日

晴、左函根廣井二郎来者左函根湯本久弥義秀三郎ニ来狀ヲ送ル、荻井伊助義之ヲ、出ヲ入来狀ヲ送ル、田尾吳一郎ヲ送ル、大隈邸ニ参ル、事件金ノ為張ヲ打合セ、つきて打合セヲ為ス、坂本嘉治馬ヲシテ郡山博士ヲ訪ハシム、郡山博士紀念碑出版刷ニ付テノ談ヲ為ス、田中博士ノ談ヲ為ス、百四十円ノ寄附ヲ受ク、七池書三ヲシテ田墨化ノ寸評ヲ作ラシム、

二書状を認め、四軍落城甚し御七
交渉條を議し、文林の船を焼き、
地方掠奪（中略）し遠遠の郷に到
る、終歳を費信為に戻り来る

二十九の

時、増田義一二書状を認め、素服令
務これ事務、白勢沼の事村
真夫に取次状を附す、小久江成一二書状
を認む。平沢淑印と書状を認む
銚子出張中碑式帰途ともに午

後義直を忍ち拘を数出現す、西沢利五
郎（中略）中の浦の義四郎宅に帰す、小
松屋国吉蔵集の駅書を取し如し、

三十の

時、古池世話の山内を訪ふ、今日
指動き預り屋上に招く、昨日引渡
きの松屋国吉状を認む、晩亮外
事務、平沢淑印銚子出張を送る、仍
本部況為を電話す、銚子遠碑式
事務、二十数通出し了る。松井部
沼義之先子ともに事務、増田義一ら

[illegible]

三十一日　天長節

朝来好晴去年紀元節布令後雪
連續式に関しうる為を執り増田義
一小林四三郎田中徳積に書状を送り
す、又新潟杉井郡流に投函、又高
田四十番に書状を送る、往復書八来
該、文来陸海の行を高す、平沢邸

[illegible]

[illegible]来る件雲脚
茅に墨仙山西[illegible]代を出る三十二日の
内不用の西隅下物を出し二十五日
残金[illegible]を[illegible]二三の
書状を[illegible]元干の国書を編ム

次下九月別冊

中央研究院

以下全て

白紙